



☆ 校長室だより 最終号

佐喜浜小学校の前校長が、体調を崩され、急遽退職となった後に、佐喜浜小に新任校長として配属されたのが、私であった。

55歳まで、学級担任ばかりで、中川内小学校での教頭経験は2年、ということで、周囲の方々には不安があったのではないかと、今更ながら思う。私にも不安があった。

このような私を佐喜浜は、温かく迎えてくれた。

私は、教頭に昇任した時から、「校長になりたい」そう思っていた。なぜなら、自分の中でやってみたかったことがあったからだ。それは、学校を地域づくりの核にしたい、ということと、自らが長い間押し付けてきて、大いに反省していた、やらすやらされる教育からの脱皮である。また15年間を通した教育連携体制の実現である。まとめると以下の3点になる。

- 1 地域の中の学校
- 2 自ら学び、学び合う授業の実施
- 3 学校間連携（保小中）

ただ、校長経験のない私にとって、1年目は、まずは教職員からの信頼を得ることと日々の校長のルーティーンを抜かりなくこなすこと、そして市教委や県教委との折衝や提出物の作成等々、なかなかやりたい教育にまで、手が回らなかった。

しかしその中でも、地域学校協働本部の実働化に向けた再結成だけは、1年目でやり遂げようと思い、コーディネーターの谷口氏や山本氏の助言をいただき、進めることができた。この年は交通少年団活動のスタート年でもあった。松浦交通課長と宮脇安全協会職員の意欲的な姿勢に、巻き込まれた感のあったスタートだったが、今やこれも佐喜浜の地域学校協働本部活動の土台のひとつになっている。新任どうし1年間一緒に学校をリードした泉井教頭が、たった1年で佐喜浜小を去ったのには驚いた、次の年の春だった。また、大変残念だったのが、自校給食の終了である。食は健康の源、成長の源である。あの温かい給食は、もう帰ってはこない。施設の老朽化など致し方ない要因はあろうが、やはりできたての佐喜浜オリジナル給食には、今の給食はかなわない。

自分たちで学び、学び合うスタンダード学習が実質的にスタートしたのは2年目であった。「勉強は自分たちでするもの」というキャッチフレーズは、先生が教える仕事を拒否したもの、さぼっているもの、そのようにとらえられかねないと危惧する向きもあった。しかし、情報化時代が幕を開けてある程度年数が経った昨今、学びはいつでもどこでもできるという考えから、私はあえてセルフレッスン型スタンダード授業を選択した。そしてそれを提唱しリードする西留安雄先生を講師に招き、児童主体・全員活躍型の授業へ舵を切ることにした。3・4年生担任であった山本まや先生やこの年に転任してきた谷岡守先生、細川明美先生方がこの新しい学習法に理解を示し、中心になって進めてくれて、今では当たり前になった授業スタイルの基礎が確立できた1年であった。12月には、スタンダード学習佐喜浜小自主発表会を行い、市内外の先生方に子どもたちが自分たちで学ぶ授業風景を見ていただいた。そこで、高い評価をもらったことは、今でも昨日のように覚えている。コロナに悩まされながらも、着実な1歩を歩めた2年目だった。

3年目。「中山間における特色ある学校づくり推進事業」という県教育委員会指定の研究校となった。私自身は、自慢は全く出来ないが、納得できないことをやらされることが嫌なタイプだった。そして基本的に組織に合わせるのに大変ストレスを感じやすい方であった。ゆえに、「県教育委員会指定」というだけで、本来はあまり気が進まなかった。でも、この指定事業は、私が佐喜浜で行いたかった教育方針と重なるところが多く、子どもたちのためにも先生方にもまた佐喜浜地域にとってもプラスが大きいと考え、反転し、意を決して、積極的に取り組むことにした。また、スタンダード学習の学び方とこの指定事業の中心となる学び方「探求学習」とは、これも重なる点が多く、子どもたちにも違和感はなく、スムーズに受け入れられたようであった。また、佐喜浜地域学校協働本部の皆様を中心とした地域の方々の、学校への全面的な協力体制があり、コロナ禍とい

う試練を乗り越え、本研究は大きな成果を残すことができた。地域のことを知り、学び、伝え、新たに創り上げていくという学習は、2年間の指定が終わっても、ずっとずっと続けていきたい学習である。

「中山間における特色ある学校づくり推進事業」2年目となった令和4年度。学校運営協議会がスタートした年でもある。学校が地域とともに歩むためには、地域の方の声を学校の教育方針に取り入れていくことがなければ、掛け声倒れになることは否めない。そこで、この組織を立ち上げ、学校長が考える学校経営計画について、ご意見等をいただき、それを教育活動に反映していくというしくみが成立した。これは大きな変革である。せっかくできたしくみである。これをうまくいかすかどうかは、これからだと思う。組織や仕組みが整っても、最終的にはそこにいる人がどう動くかによって、その組織の成否が決まる。これが、学校だけでなくこれからの佐喜浜を動かす影響力のある組織の一つになる可能性もある。佐喜浜発展に有効に機能する組織として、これからもこの活動に期待したいところである。いろいろなチャレンジの中、あまり大きくは取り上げられなかったのであるがこの年に、新たな指定も加わっている。それはNIE「新聞を通した言語学習・コミュニケーション学習」である。新聞の良さについては、これまでも「校長室だより」で複数回伝えてきた。要は文字が周りにある環境、周りの大人が文字に親しむ環境をつくれているかどうか、それは子どもの学力に影響を及ぼす。高知新聞社は、高知の優秀な「文字書きさん・伝達屋さん」が集まったプロの組織である。地元の知能集団から、私たちが学ぶことは大きい。高知県民みんなで支えて、頼りにしていきたい知的集団である。また、子どもたちの教育にとっても、ふるさとの情報が満載であるし、高知の発展を望みながら情報発信している地元新聞は、なくてはならないものであるだろう。「新聞に載る」というのは、令和の代になっても、良かれ悪かれ大きなニュースであることには変わらない。

令和5年度の今年のスタートは、私自身も困惑のスタートだった。県指定の2年間を為し終えた後、新たな取組として、高知授業づくり研究大会を行い、佐喜浜のスタンダード学習を揺るぎないものにしたいということと、佐喜浜小150周年記念を行い、コロナ禍で元気を失いつつある地域に自信と誇りを取り戻したい、これからの佐喜浜小の発展につなげたいと意気込んでのスタートであったが、予想外の人事異動で、計画に暗雲が立ち込めた4月であった。しかし、新しく赴任していただいた方々の努力や引き続きの勤務となった教職員の方々のしきりを決めない協働的な働きぶりによって、最終的には、予定された2大行事（研究大会・150周年記念行事）も、盛会のうちに終わり、納得感のある1年を過ごすことができたと思っている。本年度はこの他にも、4年目の項でもお話ししたNIE教育研究最終年の発表や佐喜浜中学校が行う実践的防災研究校の協力校としての取り組み、またみずほ銀行の支援による「ふるさと学習僻地教育助成事業」など、本当に多岐にわたる教育活動を実践してきた。特に、みずほ銀行さんの支援（10万円）は、令和3年度4年度に行ったふるさと創造探求学習の成果をつなげ、定着させていくためにたいへんうれしかった。ただし、教員数減の中、これまでの取り組みを同じように行っていくのには、先生方にも地域の方々にも負担が増してきている。今年度の一つの区切りとして、発展的解消をしたり、集約したり、取捨選択したりするものもあろうと思う。新体制の中での賢明なる道の前進を望みたい。

150周年という歴史を着実に刻み、重みを増しつつある佐喜浜小学校。そして、東部地区にあって、独自性もあり、時代の流れに応じた変化にも柔軟に対応できる佐喜浜の教育体制は、県下を眺めても、圧倒的な存在感を示していると感じる。記念誌作成や記念行事を行うにあたっては、西本実行委員会会長、植元記念誌作成委員会委員長他、保護者・地域の方々及び市の教育関係者に多大なる協力をいただいた。やり終えた後には大きな満足感がある。

多くの著名人の名言にあるように、人生、そして成長は「出会いと本と映画から」成り立っている。つくづくそう思う。ここに赴任するまでは、私にとって佐喜浜は、正直未知の地であった。しかし5年前のここに足を踏み入れ、その後子どもたちを通じて、関わることになった佐喜浜は、今や私の人生の中の大きな位置を占めている。確実にこの5年間は、自らを成長させてくれた忘れられない思い出の地として残り続けるであろう。

昔は花形と言われた教師という仕事も、今や教育界という狭い世界で働くことへの嫌悪感、そしてブラックと評される勤務状況からか、これを望む者は多くない。時の移り変わりは、意識、考え方、価値観の移り変わりとも言えよう。私自身、後悔のない人生かということ、そうだと堂々と言い切れない所もあるが、佐喜浜での5年間には満足感しかない。なぜならば、出会った方々が、素晴らしかったからである。ありがとう佐喜浜。ありがとう子どもたち！